

ライティング指導とフォローアップの試み

大学教育機能開発総合研究センター 渡邊淳子

1. はじめに

本学が平成 21 年度から 3 カ年で取り組んできた文部科学省の大学教育推進プログラム (GP) 「学習成果に基づく学士課程教育の体系的構築」において、アカデミック・ライティング (以下、ライティング) 指導は本 GP が掲げる「専門的要素」「一般教養的要素」「汎用スキルの要素」「コンピテンシー的要素」「特定スキルの要素」の五つの学習成果の大区分のうち、「汎用的スキル」の範疇に入る。なぜならば、論理的文章を作成するためには、文章を組み立て表現する能力のみならず、情報を収集し整理する能力、文献の読解力などが求められるからである。場合によっては、これに数的な処理能力も入るだろう。また、それぞれの分野における先行研究に真摯に向き合う姿勢、社会、歴史、文化に対する不断の興味を抱き続けることもまた、欠かすことのできない要素である。これらの能力や姿勢は、自立した社会人に求められる資質でもある。

本学におけるライティング指導の実践は、学生のライティングに関する自律的な学習の支援を図ることを最大の目標とした。そのために、平成 22 年度からライティング指導室開設の準備にかかり、翌 23 年度に正式にスタートさせるとともに、テキストとカリキュラムの開発や学生への直接指導に取り組んできた。数的に限られた指導体制の中で、より多くの学生に効率的な指導を行うために、オンラインを含めた個人セッションのほか、少人数制クラス方式による短期集中コースなどを企画した。学生の関心も徐々に高まっており、指導室を利用した学生の延べ人数は平成 23 年度末までに 1,000 人に達する見込みである。

2. 背景

近年、ライティング指導を行うセクションを設ける大学が増えつつある。その先駆的な存在が早稲田大学の「ライティング・センター」である。同大学ではアメリカの大学で主流をなすライティング・プロセス (Writing Process)^①の手法を取り入れ、多数の大学院生をチューターとして採用し、日本語、外国語を問わず学生の指導にあたっている。日本語ライティング指導に特化したセンターとしては、金沢工業大学が外部添削者による論文、レポートなどの添削を行い、就職試験のための小論文、エントリーシート、各種手紙などの文章指導を行っている。津田塾大学におけるライティング指導は、キャリア教育の一環として位置づけられ、チューターとして採用された大学院生が指導にあたる。また、関西大学も文学部学生が対象ではあるが、TA を常駐させて主に卒業論文 (2 万字程度) の指導を行っている。

ライティング・センターの運営、対象学生、指導法は各大学で異なるものの、その根底には学生のライティング能力の低下に対する危機感がある。多くの学生が頭を悩ませるのが、文章の論理性である。中学、高校の学習指導要領では「根拠を明らかにし、論理の展開を工夫して書くこと」や「論理的な構成を工夫」することがうたわれているものの、現実には作文や感想文に見るような心情の伝達を専らとする「文学教育」が主流であるという指摘もある (木下, 1994, 33-35)。

表 1：書くことについて

	度数	%	累積%
得意	23	1.5	1.5
どちらかという得意	96	6.2	7.7
普通	473	30.7	38.4
苦手	557	36.2	74.6
とても苦手	390	25.3	100.0
合計	1539	100.0	

さらに、多くの学生が文章作成に対する苦手意識を抱いていることも問題である。平成 23 年度に本学が全初年次生を対象に開講したベーシックにおいて実施したライティングに関するアンケート（有効回答 1539）によると、文章を書くことが「苦手」あるいは「とても苦手」とする学生の割合が合わせて 61.5 % を占めた（表 1）。ほとんどの初年次学生にとって、論理性を前面に出した文章は初めての経験である。にもかかわらず、大学における従来のライティング指導は限定的であり、こうした苦手意識を持つ学生を学部横断的に指導するシステムは、ほとんど見られなかった。

本学におけるライティング指導室の設置も、ベーシック受講後の学生に対する学部横断的なフォローアップを企図したもので、2 コマのベーシック科目で学生の苦手意識を和らげライティング指導室で細やかな指導をしていくという流れを想定している。そこでは、ライティング・プロセスの手法を取り入れ、添削によって「よい文章」にするのではなく、書き手が「よい文章」に到達できるように、その方法を指導していくことになる（佐渡島, 2008）。このような指導法は、単に文章の構成や表現法にとどまらず、学生に論理的な思考の習慣づけを促すきっかけにもなる。

3. 具体的取り組み

(1) テキストの作成

今回の GP におけるライティング指導は、テキスト作成、講義実施、フォローアップ指導の三つの柱からなる。中でも独自テキストの作成は、講義およびフォローアップ指導の根幹をなすものである。作成は平成 21 年度から取り組み、オリジナルテキスト『レポート作成の基本』を作成した。同テキストは平成 22 年度に実施した基礎セミナー前期において使用したのち、小幅な改定を加えて同年度後期の基礎セミナーでも学生に配布した。さらに前・後期の基礎セミナーでの実践を踏まえてさらに踏み込んだ改訂を施し、平成 23 年度基礎セミナー科目用に改訂を行って現在に至っている。

テキスト作成にあたって留意したのは、①講義内容を概観するだけでなく発展させられる②実際のレポートや論文作成に役立てることができる、の二つの点である。また、テキストのサイズも、学生が気軽に手に取ることができるように A5 判のコンパクトな形にし、初回は 19 ページ、改定を加えた 1 次改訂版（平成 22 年度後期）が 27 ページ、最終版（平成 23 年度ベーシック科目用）でも 30 ページに抑えた。

3 タイプのテキストとも、講義同様に「レポートの構成」「わかりやすい文章の作成」の 2 部からなる。「レポートの構成」においては、序論・本論・結論からなるレポートの基本構造について詳細な解説を行い、テーマ設定から構想、執筆に至る手順についても紙数をさいた。また、文献引用に際しての

注意事項を掲げ、インターネットからのコピーペーストといった文献盗用・剽窃に対する注意も喚起した。

一方、「わかりやすい文章」の項目では、文章作成の要点を「短文」「一文一義」「主述の一致」「曖昧表現の排除」の4点に絞り、例文を使いながら詳細な説明を試みた。これらの4点は、過去に学生が書いたレポート等を分析し、文章作成の中で最も誤りやすいと思われる要素を抽出したのちにまとめたものである。

主な改定としては、第1次改訂版（平成22年度基礎セミナー後期使用）では全体の体裁を整え、アウトラインシートを加えた。最終改訂版（平成23年度ベーシック使用）においては、このアウトラインシートを視覚的にしたダイヤモンド図を考案し、実際の使用例をつけて紹介した。これにより、テーマ設定、ブレーン・ストーミング、素材の取捨選択と続く一連の執筆前段階の流れののちに、学生が文章の全体構想を俯瞰できるようになった。

（2）講義の実践

①平成22年度「基礎セミナー」

平成22年度は全学部の初年次生を対象とした「基礎セミナー」（全15コマ）の中の1コマをライティング指導に充当した。講義の実施概要は表2の通りである。

表2：講義の実施概要

前期：平成22年6月10日～6月18日			後期：平成22年10月22日～10月28日		
6月10日	5限目	受講 199人	10月22日	4限目	受講 14人
6月11日	3限目	受講 99人	10月28日	5限目	受講 33人
	4限目	受講 129人		5限目	受講 38人
	5限目	受講 120人			計 85人
6月17日	5限目	受講 112人			
6月18日	4限目	受講 113人			
		計 772人			

前後期総計 857人

講義は『レポート作成の基本』（後期は改訂版を使用）に沿って進めた。前期が199人を最大に毎回100~130人程度の大人数が対象だったのに対し、後期は14~38人といった少人数に対する講義となった。前期はテキストを使った説明ののちに「中学生の携帯電話所持について」というテーマを与え、簡単なアウトラインシートの作成を課した。各グループ90分という時間的な制約もあり、文章作成まではいかず、文章に関する簡単な問題（3問）を解かせるのみに終わった。

前期の反省を踏まえ、後期は学生がレポートを構成する序論・本論・結論の3要素に沿って柱を考えられるように、項目を細分化したアウトラインシートを用意して講義に臨んだ。「大学入試は必要か」というテーマを与えてアウトラインシートを作成させ、講義時間中にアウトラインシートを基にして簡単な文章作成を行わせた。

②平成23年度「ベーシック」

最終年度に開講された「ベーシック」は、初年次生が大学生活において必要な知識を学部横断的に指

導するものである。全 8 コマの講義のうち、ライティングに関しては前年度に開講された基礎セミナーの 2 倍にあたる 2 コマ分が割かれた。実施概要は表 3 の通りである。

講義の実施にあたっては、前年度の反省を踏まえ演習に力を入れた。1 コマ目を構成編、2 コマ目を文章編に分け、1 コマ目においては文章の成り立ちと文章執筆に至るまでの手順を指導した。学生には「お金」というテーマを与え、アイデアマップを使ったブレイン・ストーミングの後にダイヤモンド図を作成させ、提出させた。

2 コマ目は前述した文章作成における四つの要点を中心に説明したのち、前回作成したダイヤモンド図を基に 1000 字程度の文章作成を課した。完成文章は全員に提出させ、ダイヤモンド図とあわせて成績評価の対象とした。

わずか 2 回の講義とはいえ、ベーシック「レポート作成の基本」に対する学生側の反応はおおむね良好であった。受講後に実施した学生アンケート（有効回答 1539）を見ると、講義全体の難易度について、構成編では「理解できた」が最も多い 56.5% で、「よく理解できた」とあわせると 66.6% に上った（「普通」28.9%）。また、文章編も「理解できた」「よく理解できた」とする回答の割合は 67.0% だった（「普通」30.1%）。一方、講義全体については「参考になった」「大変参考になった」が 77.2% を占め、「参考にならなかった」「まったく参考にならなかった」は全体の 2% にとどまった。（表 4）

表 3：ベーシック「レポート作成の基本 1・2」受講者数（人）

	内容	日程	3 限	4 限	5 限	合計
前半	レポート作成の 基本 1	4 月 22 日（金）	140	178	146	464
		4 月 28 日（木）	112	134	169	415
	レポート作成の 基本 2	5 月 6 日（金）	135	172	142	449
		5 月 12 日（木）	104	136	169	409
後半	レポート作成の 基本 1	6 月 24 日（金）	157	136	187	480
		6 月 30 日（木）	111	137	233	481
	レポート作成の 基本 2	7 月 1 日（金）	155	134	115	404
		7 月 7 日（木）	108	135	191	434
	合計（人）		1022	1162	1352	3536

表 4：講義全体について

	度数	%	累積%
全く参考にならなかった	3	0.2	0.2
あまり参考にならなかった	27	1.8	1.9
普通	322	20.9	22.9
参考になった	885	57.5	80.4
大変参考になった	301	19.7	100.0
合計	1539	100.0	

1 クラスあたりわずか 2 回の講義では、ライティング技術を習熟させることは不可能である。実際に学生が提出した課題文も、作文の域を出ないものが数多くみられた。ただ、アンケートからは書くことに対する苦手意識を持つ学生の側の危機感もうかがわれた。フォローアップ指導を目的に開設されたラ

ライティング指導室に、予想を上回る数の学生が継続的な指導を希望して訪れたことも、こうした危機感の裏付けと言える。

(3) フォローアップ指導

① ライティング指導室の開設

ベーシックにおいて喚起したアカデミック・ライティングへの興味をいかに持続させるかということは、今回の取り組みにおける最大の課題であった。そこで、平成 22 年 12 月から「ライティング指導室」の開設準備を始め、平成 23 年 4 月のベーシック開講と時期を同じくして指導室を開設した。

指導室が扱うのは日本語のアカデミック・ライティングである。人数の変動はあるものの、平成 24 年 1 月現在、特定事業研究員 1 人、事務補佐員 1 人、TA (修士課程学生) 1 人で運営し、個別指導と特別コースによる集団指導を行っているところである。開設以来、指導室を訪れた学生は延べ 916 人 (1 月 24 日現在) に上る。ベーシックのアナウンス効果もあり、ほとんどが初年次生であったが、積極的に指導室で指導を希望する 2~4 年次生も見られた。

② 個別指導

個別指導は面接指導とオンラインセッションの 2 本立てで行ってきた。個別指導は予約制で、1 セッション 45 分で行う。オンラインセッションは随時行うが、何回かに 1 回は面接指導を受けることを原則としている。両指導とも、指導室が出した課題について書かせるやり方である。また、添削法を極力排し、指導者との対話の中で気づきを与える「ライティング・プロセス」の手法を採用していることも、本指導室の大きな特徴である。指導においては、文章の構成に重点を置き、表現や資料の使い方、引用のやり方などを必要に応じて適宜入れている。学生の中には、指導室が与えた課題以外に、講義レポートや学外に提出する文章について助言を求める学生も多く、指導室ではこうした学生への指導も行った。

③ 特別コースの開設

本指導室では当初、個別指導を業務の柱とする予定だった。しかし、ベーシックが終わりに近づくにつれ、継続的な指導を求める学生の数が増え、現有スタッフでの対応が不可能になってきた。このため、複数の少人数クラスを編成して数回の講義 (非正課) を行う特別コース制を導入した。

コースは週 1 回の計 5 回とし、23 年度は 6 月から 7 月にかけて 6 クラスで計 30 人の学生を対象に開講した。講義の内容は、アカデミック・ライティングの構成に基づき、テーマ設定からアウトライン作成を経て文章を完成させるまでの一連の流れを実際に経験させた。8・9 月には 1 日に指導を集中させた集中コースも試行し、17 人に対して 3 コマ分の時間枠で同様の指導を行った。

両コースとも指導室へのリピート率は高く、ほとんどの受講生が個別指導に回っている。そこで、さらに高いレベルのアカデミック・ライティングに挑ませるため、1 万字程度の本格的な論文の完成を目指す「論文作成コース」(週 1 回) を 10 月に開設したところ、初年次生を中心に 10 人が応募し現在に至っている。

4. おわりに

ライティング指導は学部を問わず、全学横断的に行う必要がある。本学の場合、入学間もない時期に 2 コマの講義ではあるが、「書く」ことへの動機づけを行い、希望学生にはライティング指導室での継続的な指導を行った。指導室を利用した学生のほとんどが初年次生であったことを考えると、ベーシッ

クが呼び水となったことは間違いない。

また、今回、特筆すべきは、指導室の門をたたいた全ての学生が自発的な動機によるものであったということである。初年次生の6割超が書くことを「苦手」とする現状と考え合わせても、学生側の危機感がうかがわれる。こうした学生のモチベーションをいかに維持して継続的な指導を行うかが、今後の指導の目標となる。

指導室運営については、より多くの学生に対して質の高い指導を担保するために、複数のTAを養成することが必要となる。また、オンデマンド授業の実施やオンライン予約システムの開発などを通じて、指導室がすべての学生にとっていつでも開かれた場となることが望まれる。

注

- (1) 指導の重点は「書いた後」(添削)でなく、「書く前」や「書く途中」における評価に置かれる(North, 1984)。言葉をかえるなら、書くプロセスを通じて、学生に論理的な文章とはどのようなものかということを経験させ、自立的な書き手を育てることでもある。

参考文献

木下是雄, 『レポートの組み立て方』, 筑摩書房, 1994.

佐渡島沙織, 『これから研究を書く人のためのガイドブック ライティング挑戦の15週間』, ひつじ書房, 2008.

North, S. M., The Idea of a Writing Center, *College English*, 46 (5), 433-446.